

## 「沈黙の春」

レイチェル・カーソン

青樹築一（訳者）

A5版, 403ページ, ¥2,400  
(新潮社, 12版 2007年5月20日発行)

公衆衛生学のバイブルとも称される「沈黙の春」(Silent Spring)は20世紀のロングベストセラーとして、初版から40年余り経った今も読むたびに公衆衛生学を専門とする研究者のみならず、多くの人々に感動を与えている。近年の地球環境問題を誰より早く問題提議した著書は、正に今ここに紹介させていただきたい一冊である。

本年5月27日は、アメリカのベストセラー作家、海洋生物学者で、農薬による環境汚染を描いた「沈黙の春」で知られるレイチェル・カーソンの生誕100年にあたっていた。

レイチェル・カーソンは、1907年5月27日、ペンシルベニア州スプリングデールに生まれた。大学では生物学を専攻したが父と姉が急死し、母と姉の2人の遺児を支えるために連邦漁業局に就職。仕事は海洋資源などを解説する広報誌の編集であった。というレイチェル・カーソンの履歴が本著書の解説にある。

この「沈黙の春」(Silent Spring)執筆のきっかけは、役所が殺虫剤のDDTを空中散布した後に、庭にやってきたコマドリが次々に死んでしまった、という内容の友人からの1通の手紙でから始まった。それから4年の間、自らが綿密な調査による正確な情報により真正面より地球環境問題を逸早く提言した著書と言えよう。

来年には北海道での環境サミットの開催が予定されているが、それまでに至る背景には、「沈黙の春」(Silent Spring)の思いが込められていると思う。そして、これからも本著書が次の世代に受け継がなければならない大切な「教え」にしなければならない。その室内環境学会の会員はもとより、「環境を語る方々」には自身の成長に合わせて繰り返し読んでいただければ新しい感動が得られるはずである。

ここにレイチェル・カールソン(Rachel Carson)の生涯を紹介する。

- 「沈黙の春」(Silent Spring)によりDDTなど有機塩素系農薬や有機リン剤の恐ろしさを人々に訴えた。
- 1962/6ニューヨーカー誌に「沈黙の春」(Silent Spring)を連載。
- 「人間は他の生物の犠牲なしにいきられない。だからこそ自然に対する責任がある」という強烈なメッセージを発信
- 全米農薬協会が中傷をおこなったが、1962/8/29ケネディーの「カールソン女史の記述によって、農薬の問題が明らかになった。
- この問題を取り上げた内務省のスチュワート・ユードル長官をケネディーが支持した。
- 1964/4/14乳癌により死亡。生涯独身の56歳。
- 「沈黙の春」は1964年に邦訳がでる。

(東京歯科大学 衛生学講座 講師 須山祐之)